子どもをどうとらえるか（第三回）

県教研「能力・発達分科会」十年間の論議から

片岡　弘

三、子どもの「可能性」を引き出す教育実践

子どもは本来、その発達の各段階において、「人間が人間として成長していく」ための、多くの課題をになわなければならないものである。しかし今日の子どもたちは、家庭や地域、また学校の中でさえ、自らの心と身体を能動的に働かせる機会を著しく欠き、様々な課題に自主的に立ち向かう経験から遠ざけられている。その結果としての遊びの貧しさ、勤労体験の欠如、そして映像文化による知識・情報の氾濫等は、子どもから思考を奪い、生活に根ざした要求を育てず、さらには文化の人間的な交流を妨げ、感情や認識の歪みを生み出している。子どもの生活、行動、意識に現象するところを数え連らねれば、切りもなく、否定的としか受けとめられない側面のみが浮かび上がってくる。

しかし、それでもなお子どもたちは、すばらしい可能性の芽をその内面に秘めているのだ。そしてその芽は決して、管理主義、能力主義の側からは見出し得ない。

(1)　子どもをみる「教師の目」

悔しかったら「くやしい」と

「せんせい　くるとき（学校へ来る時）　はんきょお（通学班長）に　おこられました　がこ（学校）に　くる　とけいが　おくれていました　だけど　はんきょおさんが　おこりました　だから　ぼくも　おこりました　だけど

なんか　さびしかた　です」

一年生T男のある日の作文である。

無気力、無感動などといわれている今の子どもたちだが、おそらくどの子も、毎日の生活の中では、多かれ少なかれ、上級生や同学年児との間でこうしたかっとうはあるに違いない。だのになぜ、学年が進むにつれて、無表情で無感動の子どもが増えていくのだろうか。

悔しい時には「くやしい」と、憎らしい時には「にくらしい」と、そしてうれしい時には素直に「うれしい」と表現できる子どもに育って欲しいと願い、T男のような作文をうんとだいじにしながら、一年生の文章表現指導を続けている。

―一九八〇・一一・一八―

ユーモアで「天」を書いたK君

一年生もずいぶんとおとなになった。

後半に集中して出て来る漢字や片かなの学習にも意欲をわかせ、

「…きのう、音おさん（おとうさん）が…」

などと作文に書いてすましている。

早生まれで、ひらがなの習得がいちばん遅れていたK君は、どうにか簡単なひらがな文はつづれるようになってきたのだが、漢字はまだ、どうもサマにならない。

そのK君、「天」という字が出て来た時、「先生、ぼく書けるよ。書けるよ」と言って手を挙げた。指名されたK君、つかつかと出て来て真新しいチョークをつかむや、大きな声で「てん」と言いながら黒板の真ん中に力いっぱい点を打った。

意表をつかれた私の顔を見て、ニヤリと彼。他の子どもたちにもこのユーモアは通じて、爆笑の中を彼は意気揚々と席に戻った。

―一九八一・一・七―

命の誕生に新鮮な興奮

「先生、水族館作ろうよ」というA男の発議で、教室の窓際に〝二の一すいぞくかん〟ができた。タニシやザリガニの水槽には小石やブロックのかけらが入れられている。男の子たちは、自分の体験を通してザリガニなどの生態をちゃんと心得ているのだ。

女の子たちは、短い触角を動かしてはい回るタニシを見て、最初、「気持ちわるーい。捨てて」などと言ってきたりした。

ところが何日か後の朝教室へ行ってみると、女の子たちがタニシの水槽に群がっている。私を見つけて、「先生、タニシの赤ちゃんが生まれてる…」とB子。

見ると、ガラスの壁面でじっと動かない大きなタニシの

腹部から、白い粘液状のものが水中にたれさがり、その先端に真珠のように透き通った小豆粒ほどの巻き貝がゆれている。「きれいだね」と子どもたちは、新しい生命誕生の神秘さに打たれているようであった。

―一九八一・五・二七―

「遊び」は大切な学力の土台

「…そして、たたみを川にして、ざぶとんをしまにして、はこのふねであそびました…『キャンプしよう』とゆって、しまでキャンプをしました…Nくんのはこをうすにして、ぼくのふねにのせてあったとんかちでもちをつきました。そして、パッチ（メンコ）をさらにして、うそでたべました…」（二年S男）

子どもが遊びを失ったといわれて久しいだけに、こうした作文に出合うと砂浜で落とした百円玉を探し当てた時のようにうれしい。ヴィゴツキーという心理学者は、「子ども（幼児）は本質的に遊びのなかで発達する」と言った。低学年の子どもたちには、まだ、まだ、こうした「遊びの創造」が必要なのだ。「遊び」の中で子どもたちは、学力のだいじな土台を構築する。

―一九八一・八・二六―

〝ごっこ〟で伸びる豊かな発想

放課後、下校したはずの二年生の教室が妙に騒がしい。行ってみると、戸をぱっちり閉めて、男女十人ほどの子どもたちが輪を作ってすわり、笑いこけている。

輪の中では、A男がランドセル用の黄色いカバーを頭にかぶり、アノラックを前後逆に着た奇妙な格好で、「火星人」を〝演技中〟。

そのうちに机のかげからB男が現れた。カッパずぼんを頭にかぶり両足とびで出て来たのだが、つま先にビニール製の手袋を履いている。見物の子どもたちがどっと笑った。「月のウサギ」だという。

大人から見れば荒唐無稽なのだが、彼らはそこに虚構の世界をつくり上げて楽しんでいるのだ。それにしても、手袋を履いてウサギの足を表現するなど、大人には思い及ばぬことである。

子どもは本来、こうした遊びの中で表象を駆使することを学ぶのであろう。

―一九八二・二・一七―

口も達者になって「八歳の春」

チャイムが鳴ると、待っていましたとばかりに男の子たちが教室を飛び出して行った。「けいさつごっこ」だとい

う。警察官になった子が百を数えている間に、〝どろぼう〟たちが逃げる……結局はオニごっこなのだが、最近彼らが考え出した遊びである。五～六人がグループになっているようで、休み時間が終わると、汗だくで教室に戻って来る。

女の子たちもグループで遊び始めた。昼休みなど、「先生、私たちがボールやってるとA男ちゃんたちが来て、じゃまするの」と、B子たちが連れ立って教務室に現われた。これも最近の現象である。

学期末の懇談会で、ある母親が言っていた。「口も達者になって……この前など、『あんた、それでも母親なの』なんて言うんですよ」四月からは三年生の彼ら、どうやら確実に「ギャングエイジ」は訪れているらしい。

―一九八二・四・七―

(注)　以上は、新潟日報教育欄「にいがたの教師の目」に私が寄稿したものの中のいくつかである。新潟日報学芸部の了解を得て転載した。（三十二次教研で一部紹介）

(2)　人間回復の教育実践への模索

北魚沼郡明神小学校（僻地一級）は、上越線越後堀之内駅から山あいに八キロほど入った明神地区にあった。全校児童三十人足らずの小さな小学校なのだが、子どもたちの「おかしさ」に最初に気付いたのは母親たちであった。「うちの子は運動会の徒競争ではいつも一位だから、『走る力』があると思っていたのに、ある日川原で走る姿を見ていたら、まるでぎこちなく、これはたいへんだと思った」というのである。「そう言えば、川原で遊んでいる時、自分たちの所は晴れていても上流の空が暗くなってくれば、やがて川が増水して危険だということを昔の子どもは知っていたが、今の子どもはそれを知らない……」「今の子どもたちは同学年の子としか遊ばないようだ。だから、行動の仕方や物事の判断の仕方を遊びの中で学ぶことができなくなっているのでは……」等の意見が相次いで出され、「今親たちは、子どもたちに何をしてやったらよいのか」を話し合ったという。「明神自然学校」がこうして誕生した。（二十六次教研・北魚沼支部目黒和男氏の報告＝一九七六年）

「自然学校」では先ず、村の老人たちから手ほどきを受けて子どもたちがそれぞれ自分のワラぞうりを作り、それを履いて、川原での活動に参加した。一つの班を一つの自治体に見立て、村長を決めて、各村が次のような仕事を分担する。

①　トイレづくり

②　道づくり……川原に降りる所の草を刈って道をつけ

る

③ 箸づくり……小刀で、柳の木を使って
④ たきぎ集め……流木をノコギリやナタで
⑤ かまどつくり
⑥ え物さがし……川で。魚は一人三匹くらい

「お父さん、お母さんの子どもの頃の農業、道具の違い、生活・遊び」と題した講座も開かれた。講師は勿論子どもたちの父母である。楽しい夕食の飯盒炊さん、川原での「歌ごえ」「人間いかだ」「水中宝さがし」等々。父母たちは子どもたちがこんなに生き生きと活動する姿を初めて見た思いだったという。

① とにかく手を出さず、子どもたちのやることをよく見ていよう。（ほう丁の使い方、飯のたき方、鍋の洗い方等々）
② 自分の子どもは、集団の中でどう行動しているか、集団との関係の中でみよう。
③ 地域の子どもをみんなで育てる観点で指導しよう。
④ 歌やゲームのときは、子どもたちよりはしゃぎまわろう。

以上は、その時参加した親たちの、事前の申し合わせ事項である。（二十六次新潟県の教育）

七九年に、明神小学校は、隣接の原小学校と統合新設された。しかし、「……学校という枠から子どもたちを解放し、自然に返してやることにより、その生活の内容を豊かにしてやりたい。そのなかで身につけた諸能力、さまざまな生活概念や技術は、やがて体系づけられた教科の学習内容を受け入れる大事な素地となるであろう」という「自然学校」の理想は、そのまま新設の原小学校の父母、教職員集団に引き継がれ、児童会の多彩な行事（『子ども夏まつり』『原子どもオリンピック』等）の一つに組みこまれて、一泊二日の「サマーキャンプ」として生き続けている。この「サマーキャンプ」で得た収穫の大きさを、私たちは次のような子どもたちの言葉からうかがい知ることができよう。

・竹の教室から……

「〝竹のはし〟　毎日の生活に役立てています」
「〝竹のおちょこ〟　おとうさんのばんしゃくに」

・つるの教室から……

「つるのしなやかさにおどろきました。原小の伝統工芸にしましょう」

・木のぼり教室から

「むかし、わが祖先はさるだった。木のぼりをして、そのなごりを……」

・なわないの教室から……

「正樹君はなんと、二十メートルも……。はぜなわに使っ

たらいかが」

・火の教室から……

「ちょっぴりけむりが出ただけでも大収穫」

「原始火おこしの術の困難さ、先人の偉大さがわかった」

・川の教室から……

「にじますがいたが、はしっこくて、追いかけているのか追いかけられているのか、どっちとも言えるようでした」

（以上三十四次教研・目黒和男氏の報告より）

北魚沼郡伊米ケ崎小学校の「かばんを持たない日」の実践が最初に報告されたのは、第二十四次県教研「能力・発達」分科会で（一九七四年）であった。

(注)　この時期の社会的背景については、本稿の第一章を参考にされたい。

「農業と炭焼きで生計を立てていた時代は、子どもは親たちの労働を見ながら育った。おたがいにふれ合いながら、くらしに必要なさまざまな知恵を身につけた。今、父親はほとんど通年の出稼ぎで不在、母親も日当とりで不在、子どもは遊びを忘れてテレビのとりこになっている」「夏休みのある日、母親に、裏の畑へ行ってナスをもいできなさいといわれた小五の女の子は、豆粒ほどのものまで根こそぎもいできた」等々の子どもの現実をふまえて、ここの教師集団は次のような方針をたてる。

。教室から出て、自然や社会で学ぶことによって創意をはたらかせ、学習態度を育て、いきいきした生活力のある子どもを育てる。

。教科の枠をこえ、諸教科の協力や地域の生産活動と結合させた学習の中で、子どもたちと教師のふれあいを深めていく。

そして、さらに、

。人間は自然の中で発達すること。

。人間は教育的環境の中で発達すること。

。人間は集団の中で発達すること。

の三点を確かめ合いながら、低・中・高学年毎に別表のような活動内容を設定した。

問題はこの活動の時間をどのように保証するかである。討議の末、隔週の土曜日をこれに当てることで合意され、その日を「かばんを持たない日」と呼ぶことにした。（第二十四次・二十七次・二十九次県教研＝井口隆一氏・渡辺慶昌氏の報告から）

「かばんを持たない日」の実践については詳しく紹介する紙数を持たないが、子どもたちが生き生きとその活動に参加している様子を、NHK新潟がレポートして放映している。（七十七年）また活動の中で、二年生の子どもが「ナガオカモノアラガイ」の新種を発見したなどのエピソー

（別　表）

活　動	低　学　年	中　学　年	高　学　年
自然と遊び	・泥あそび ・舟流し ・金魚すくい ・かたつむりとり ・魚とり遠足 ・四季の山野	・川原おそび ・グループ料理 ・草花あそび ・四季の山野	・魚とり名人 ・石あつめ ・池や小川の魚 ・メダカとり ・針金の輪ころがし ・遊びの工夫 ・四季の山野
遊びと 手作業	・自然探険 ・紙ひこう機づくり ・たこづくり ・こまづくり	・自転車の輪まわし ・竹馬づくり ・蚕の飼育 ・ヘチマの支柱づくり	・金工（廃品利用） ・宝の山（廃品利用）
飼育・栽培	・うさぎの餌とり ・花だんづくり ・朝顔のあんどん育て ・１人１鉢 ・球根植付け	・花だんづくり ・うさぎの飼育 ・さし木 ・１人１鉢 ・ヘチマ育て ・じゃがいもづくり	・花だんづくり ・１人１鉢 ・開拓地の豆まき ・やぎの飼育 ・ほしぐさづくり ・かぼちゃづくり
生産・労働 社会的行事 生活の問題	・山あるき ・野菜づくり ・自分の畑(1人１坪) ・七夕祭 ・やきいも ・クルミ拾い ・たき火	・野さいづくり ・よもぎだんごづくり ・自分の畑(1人１培) ・屋号しらべ ・地域のカルタ ・収穫祭 ・球根植え ・昔からの料理	・米づくり ・いねとヒエ ・野菜づくり ・自分の畑 ・ことわざしらべ ・地域気象（伝承） ・収穫祭 ・労働への認識 ・公共物の清掃
文化創造	・楽器練習 ・紙芝居づくり ・七夕祭 ・たのしみ会	・石仏しらべ ・地域めぐり ・社会科見学 ・じゅず玉づくり ・こきりこ	・学年合唱 ・村の歴史しらべ ・昔の遊び道具しらべ

ドもある。

一九八〇年からの新指導要領の実施で、「かばんを持たない日」は終止符を打つが、いわゆる「ゆとりの時間」にそれは引き継がれ、「青葉タイム」としてその活動を続けているという。

伊米ケ崎小学校・原小学校などの実践は他の周辺の学校＝教職員集団にも大きな刺激を与えたようである。隣接の小出小学校では、「児童文化の創造育成の重要さに視点を求めて」「自らの力で、学級や学校の文化をつくりあげよう」と提起して、現行教育課程の中に「なかよしタイム」を位置づけた。ここでは、米づくりへの参加、伝承遊びの継承などを中心にしながらも、「活動を通して、学級づくりを進め、より感動的な場面を子どもたちに与えよう」と、「青空子ども祭り」にまで活動を発展させている。（第三十三次県教研＝宮幸生氏の報告より）

（以下次号）

（岩船郡金屋小学校）

同和教育・部落問題に関する全ての人の必読書

東上高志同和教育著作集 全15巻

— 同和教育・部落問題の唯一の体系的手引書 —

第一期全10巻（完結）

①同和教育入門
　第18回毎日出版社文化賞受賞
②戦後同和教育の成立
③戦後同和教育の探求
④戦後同和教育の運動
⑤戦後同和教育の相克
⑥戦後同和教育の新展開
⑦戦後同和教育の証言
⑧同和教育の運動と実践
⑨社会同和教育の実践
⑩同和行政の進展と教育

第二期（1987年1月刊行予定）

①人間権の教育
②戦後同和教育史
③戦後部落問題の出発点
④戦後部落問題の展開
⑤戦後部落問題の到達点

現金定価……32,500円
完結記念特価……30,000円
（但し1986年12月末限り）

新日本書館　事務所　新潟市牡丹山4－8－3
永井ビル2F
TEL（025）274－8665